

## 修士論文概要

### 子育てに関する研究

#### — 養育内省機能とソーシャルサポートに着目して —

田久保 暁理

#### 1. 問題と目的

近年、重篤化している児童虐待の問題（厚生労働省, 2018；友田, 2018）や食べていくのもやっとの日常を過ごす子どもの貧困化の問題（内閣府, 2018a）など、基本的な生活すらままならない子どもたちがいる（松本, 2013）。また、子育て世代の共働きが増加したことにより、家事・育児時間の夫婦間でのバランスが取れず、女性への負担が重くのしかかっていること（厚生労働省, 2018；内閣府, 2018b）や離婚に対する抵抗感が年々薄れてきており結婚した夫婦のおよそ3分の1は離婚する計算となるとも言われている。（厚生労働省, 2017；総務省, 2016）。その他にも、少子化の問題の背景には、結婚や出産、子育てのしづらい社会が基盤として存在している。様々な要因が複雑に絡み合っている中で、養育者は多くのストレスを抱えながら子どもを育てていかなければならない。そのような背景の中で、子どもを育てるということは、養育者自身も同時に成長していくことが考えられる。その相互作用の中でどんな影響を受け、与えているのか、養育者の内的な要因と外的な要因の視点から子育てについて研究する。

そこで本研究では、より安定した養育態度をとるために必要な能力として養育内省機能を仮定し、現在行われている養育態度と養育者を取り巻くソーシャルサポートへの関連性を見るために、質問紙調査（研究□）とインタビュー調査（研究□）に分けて検証することを目的とした。

#### 2. 方法

対象者は、同一県内の保育園、認定こども園の2施設において、就学前の子どもを通わせている保護者を対象とした。質問紙調査で

は、既存の質問紙である、①「養育態度尺度」、②「養育内省機能質問票」、③「ソーシャルサポート尺度」と養育者と子どもの属性についてはフェイスシートを作成し回答を求めた。インタビュー調査では、予めガイドライン項目を作成し、9名の方へインタビュー調査を実施した。その後、子育てにおける具体的なエピソードを踏まえ質問紙調査の結果と照らし合わせて検討を行った。

#### 3. 結果

まず始めに、養育者の各属性による養育態度の差異を両側検定の  $t$  検定で分析した結果、「子育て経験年数長い群・短い群」と「統制的態度」に有意差が見られた。また、「子どもの人数多い群・少ない群」と「統制的態度」で有意差傾向が見られた。

次に、「受容的態度」を従属変数とし、各下位因子の高群、低群を独立変数として2要因の分散分析を行った結果、「内省的な姿勢」「試行錯誤的な理解」「確信的な理解」「情緒的サポート」に主効果が見られた。また、「統制的態度」を従属変数とし分析した結果、「道具的サポート」のみ主効果が見られた。尚、どちらの従属変数にも交互作用は認められなかった。

最後に、養育態度に対して、養育内省機能、ソーシャルサポートがどのように影響しているのかを検討するために、「受容的態度」と「統制的態度」を従属変数とし、各下位因子を独立変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った結果、2つの従属変数とも各下位因子との検討において、重回帰決定数は低いものの有意な標準偏回帰係数が認められた。「受容的態度」と各下位因子の検討では、「内省的な姿勢」「情緒的サポート」との間で正

の関連が見られた。「試行錯誤的な理解」との間では、負の関連が見られた。一方、「統制的態度」と各下位因子の検討では、「内省の失敗」との間に正の関連が見られた。また、「道具的サポート」との間に負の関連が見られた。

#### 4. 考察

まず始めに、 $t$  検定の結果より、子育て経験年数が長い群は短い群に比べて「統制的態度」をとっている場面が多いことが明らかとなった。これは、一般的に子育ての経験が重なっていくにつれて子育ての方法が定まってくるのが考えられ、そのことから、養育者自身の期待などを表明する「統制的態度」で接していることが推察される。また、子どもの人数が2人以上群の養育者は1人群に比べて「統制的態度」をとっている場面が多い傾向があることが明らかとなった。これは、及川(2014)の研究でも示されており、子どもが多いと統制が効かず、養育者の育児ストレスの要因となっている傾向があることが考えられる。

次に、養育態度と養育内省機能との関連についての結果は、内的ワーキングモデルの先行研究(森下・木村, 2004; 今里・東條, 2017)より、養育者自身の他者観のイメージがポジティブであれば「受容的態度」、他者観のイメージがネガティブであれば「統制的態度」で子どもに接していることが推察された。さらに、「試行錯誤的な理解」が低い傾向の養育者は、子どもの感情に一時的に、養育者自身の感情が混然一体となり、情緒的に巻き込まれアンビバレントな体験をすることが考えられた。その過程を経て、子どもの精神状態を適切に内省することができる時とできない時が顕在する可能性が考えられる。このことから、養育者の基盤となっている自己観や他者観は、現在の周囲の人との安心できる関係において、冷静に自己を見つめ直したり、子育てについて振り返りを行ったりすることで変容する可能性を秘めていることが示唆された。

続いて、「道具的サポート」と「統制的態度」に関連が認められたことについては、先行研究では見られておらず「道具的サポート」の多さは養育態度の統制の次元に影響を及ぼしていることが明らかとなった。安藤ら(2006)の研究より、「日常生活において実際的な手助けが少ない状況は養育者の育児不安が高くなっていること」が分かっており、「育児不安」を媒介とし、「統制的態度」に繋がっていくのではないかと推察される。尚、「情緒的サポート」と「受容的態度」関連については、先行研究で明らかとなっている。

最後に、インタビュー調査より、養育者自身が子どもを内省的に理解しようとするには、子どもの発達段階についての知識が重要となってくるのが推察された。また、実際的な手助けを誰から受けているのかということの重要性が示唆された。さらに、周囲の人からの情緒的な支えから自身の子育てのスタイルが見直され、結果的に子どもに対して受容的な態度で接することが推察された。このことから、子育てを振り返り見直す機会は、子育てスタイルが変容する可能性があり、結果的に養育態度にも変化が見られる可能性が示唆された。養育内省機能は多面的であり、内省的な姿勢の獲得までのプロセスがあることが推察された。

#### 5. 今後の課題

本研究の課題として、「養育態度」と「ソーシャルサポート」の質問紙尺度の選定、見直しが必要であること、対象者に偏りが見られたことから、対象者を限定する必要があること、インタビュー調査の調査、分析方法の見直しが必要であることの3点が考えられる。

#### 6. 主要引用文献

- 今里有紀子・東條光彦・上地雄一郎.(2017). 兵庫教育大学教育実践学論集, 18, 37-48.
- 森下正康・木村あゆみ.(2004). 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 123-131.